

## 認知症のある高齢結核患者の療養上の課題と看護師の関わり

小林日香里<sup>1)</sup> 濱口靖子<sup>1)</sup> 古田道枝<sup>1)</sup> 加藤藍子<sup>1)\*</sup> 奥田玲子<sup>2)</sup>

1) 国立病院機構鳥取医療センター2病棟, 2) 鳥取大学医学部保健学科

### Challenges faced by nurses in caring for elderly tuberculosis patients with dementia and nurses' interactions

Hikari Kobayashi<sup>1)</sup>, Yasuko Hamaguchi<sup>1)</sup>, Michie Furuta<sup>1)</sup>, Aiko Kato<sup>1)\*</sup>, Reiko Okuda<sup>2)</sup>

1) The Second Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

2) School of Health Sciences, Tottori University Faculty of Medicine

\*Correspondence: byoutou2@tottori-iryu.hosp.go.jp

#### 要旨

認知症のある高齢結核患者の療養上の課題を明らかにし、看護師として必要な関わりを検討することを目的とした。結核患者1名を対象として、看護記録から病状・患者の言動・看護師の関わり・多職種介入の情報を収集し、事例を振り返った。その結果、今回の認知症のある高齢結核患者には、個室隔離という療養環境が、身体機能の低下や認知機能の低下、ひいては不穏や徘徊などの周辺症状（BPSD: behavioral and psychological symptoms of dementia, 以下BPSDとする）の出現を招くこと、感染や転倒の危険性を説明しても、認知症のため看護師の言葉が理解できなかつたり、一時的に理解できたとしても再び忘れて、危険行動が繰り返されるという課題があった。看護師は、患者が安全に療養できる環境調整と日常生活動作（ADL）レベルに応じた援助をすること、不穏や徘徊というBPSDにのみ着目するのではなく、その裏に隠された患者の思いを推し測り、援助することが必要であった。鳥取臨床科学 8(2), 98-102, 2017

#### Abstract

The purpose of this study was to elucidate the challenges faced by nurses in providing care for elderly patients with dementia recovering from tuberculosis, as well as what is demanded in nurses' interactions with such patients. We collected information on symptoms, verbal and behavioural patterns, relationship with nurses, and multi-professional intervention from the nurses' record of one male patient with tuberculosis to reflect on this case. The results revealed that in this elderly tuberculosis patient with dementia, being isolated in a single room seemed to lower physical and cognitive functions, and eventually led to behavioral and psychological symptoms of dementia (BPSD) such as restlessness and wandering. The challenges faced by the nurses providing care were related to the patient's inability to understand the nurses due to dementia; for example, the patient could not understand the nurses' explanations on the risks of infection or falls, or even if the patient was able to understand it temporarily, he quickly forgot and repeated the high-risk behaviours. It is essential for the nurses to organize the care environment so that the patient can recuperate safely, provide care that matches the patient's level of activities of daily living (ADL), and to focus not only on BPSD such as restlessness and wandering, but to sense the patient's thoughts and emotions hidden behind these behaviours and provide care accordingly. Tottori J. Clin. Res. 8(2), 98-102, 2017

Key Words: 高齢者結核, 認知症, 認知症の周辺症状 (BPSD), 看護師の関わり; elderly tuberculosis

## はじめに

平成 26 年度の厚生労働省の調査によると、結核の新登録者及び罹患率は共に減少傾向にあるが、結核患者の高齢化が進んでおり、新登録結核患者のうち、60 歳以上の患者が占める割合は 71.2%に達していると言われて<sup>1)</sup>いる。O 県内の結核患者の治療の大半を担っている A 病院でも、結核入院患者の平均年齢は 78.6 歳で、高齢者が多くなっている。また、昨年度に入院した結核患者の半数以上が日常生活自立度 B1 以下であり、生活の大部分に介助を要していた。

橋本<sup>2)</sup>は、「高齢者はもともと認知症や身体機能の低下等の問題を抱えていることが多く、長期入院はさらに認知・身体機能の低下を招く恐れがある。」と述べている。住み慣れた自宅や施設での生活から入院となり、環境の変化にうまく適応できず、さらに結核であるが故の陰圧病棟という閉鎖的な空間が更なる認知・身体機能の低下を招いていると考えられる。実際、昨年度に入院していた結核患者のうち 3 名は認知症を合併しており、不穏や徘徊、拒薬などの対応に苦慮する場面が多々あり、私たちは患者が入院生活に適応できるよう環境を調整し、家族の協力依頼など、対応を模索してきた。

結核に関する先行研究では、患者の心理的負担に着目したものや、直接監視短期化学療法に関するものが多く、高齢結核患者の看護に焦点を当てたものは少ない。治療による副作用や併存疾患の管理だけでなく、認知機能の低下や廃用症候群などの様々な問題を抱えている高齢結核患者の看護において、看護師としてどう介入すべきかの示唆を得ることは、今後も増え続けることが予想される高齢結核患者の看護に重要であると考えられる。

## I. 研究目的

認知症のある高齢結核患者の療養上の課題を明らかにし、看護師として必要な関わりを検

討する。

## II. 研究方法

1. 研究期間: A 病院の倫理審査会承認後～平成 27 年 10 月。

2. 研究対象

1) A 病院に入院中の結核患者 1 名。

2) 患者紹介: T 氏, 80 歳代, 男性。

既往歴: 結核 (20 歳代), 認知症, 腰椎圧迫骨折。

日常生活自立度: B2。

視力: 問題なし。聴力: 難聴あり。

介護区分: 要介護 2, 週 3 回でデイサービスを利用。

家族構成: 妻と息子の 3 人暮らし。妻は、認知面は問題なく、車椅子を使用している。息子は夜勤もある不規則な勤務だが、非常に協力的で、2 日おき～毎日、面会に来る。

経過: 平成 X 年 Y 月中旬、腰椎圧迫骨折のため、C 病院に入院中、結核と診断され、A 病院へ転院となった。入院により認知症の BPSD としての不穏や徘徊などがあり、更に腰痛が悪化し、胆嚢炎を併発した。

3. データの収集ならびに分析方法

1) 研究対象患者の看護記録から、治療経過、患者の言動、看護師の関わり、多職種介入について、時系列で経過表 (表 1) にまとめた。

2) 経過表から、認知症のある高齢結核患者の療養上の課題を抽出した。

3) 経過表と抽出した課題をもとに、看護師として必要な関わりを検討した。

## III. 倫理的配慮

研究参加は自由意志であること、収集した情報は研究以外の目的には使用しないこと、個人が特定されることはなく、個人情報漏れることはないこと、いつでも研究参加を撤回でき